

日本中東学会ニューズレター

JAMES
NEWSLETTER



No.148
2017/9/30

目 次

新会長挨拶.....	1
理事会・総会報告.....	3
第33回年次大会報告.....	12
第6回日本中東学会奨励賞の選考結果および同賞授与式.....	31
第34回年次大会の開催について.....	33
公開講演会のお知らせ.....	33
会員の異動.....	34
事務局より.....	35
編集後記.....	35

新会長挨拶

黒木英充

まったく想定外のことでしたが、4月5日開催の2017年度第1回理事会において2017-18年度の会長を仰せつかりました。私は極めて非力な者ですが、他の理事会メンバー16人はすこぶる強力です。理事・会員の皆様のお助けを頂きながら務めを果たせるよう努力して参る所存です。また、今期理事会に対する会員の皆様のお力添えも賜りたく、どうぞよろしく願い申し上げます。

さて、いま本学会は様々なチャレンジを受けていると思いますが、ここでは大きく3つに分けてみます。

まず第1に、直接的には日本の大学など研究・高等教育機関一般に関わることで、2004年以降毎年国立大学運営費交付金の1%削減に代表されるような、財政的な締め付けの強化という、ネガティブな大きな流れがあります。これに加えて、最近 post truth や alternative fact といった言葉が溢れかえるような社会的環境が出現しています。正確な知識・情報を獲得・伝達し、事実を理性的に確定すること、すなわち学問・研究の営みの基盤が揺らぎ始めている、と言わざるを得ません。さらに監視社会化の動きも強まり、言論の自由や学問の自由といった、これまで私たちが当然視してきたものについても憂慮すべき状況になっています。中東諸国におけるこの種の問題もいっそう深刻になっていることは、申すまでもありません。

第2に、中東の多くの国々において、内戦や戦争が日常化し、独裁的政権による戒厳令や非常事態宣言が多発しています。市民の人権を否定する政治的暴力が、実に様々なレベルで顕在化しています。私はシリアを研究対象としているため、最近6年間は特に胸の痛い日々が続いています。そして会員の皆様も痛感されているでしょうが、学生さんを留学のために、若手研究者を長期の調査研究のために、安心して送り出せる中東の国がいよいよ少なくなってきました。

このため、第3に、シリア内戦を経て、中東諸国発の難民問題が未曾有の規模となり、ヨーロッパ諸国を中心に従来からのイスラモフォビアが強まり、各地で社会の分極化が進行しています。難民を受け入れて多様な背景を持つ者からなる市民社会を維持・発展させようとする人々と、自国第一主義を掲げて排外主義的に社会を再編しようとする人々との間の溝が、広がり深まっています。今後加速度的に人口を減少させていく日本が、移民受け入れに関して欧米のイスラモフォビアの影響を受けていることは明らかです。

このような容易ならぬ時代における本学会の役割、ミッションについて、どのように考えるべきでしょうか。

1985年の設立以来、日本中東学会が目指してきたことで、歴代会長が強調されてきたことと重なりますが、次の3点を再度確認したいと思います。

第1に、学際性と総合性を大事にすることです。本学会には人文社会系のほぼすべての分野だけでなく、建築や医学など自然科学系の会員もいらっしやいます。実はこうした多様性が見られる学会は、そう多くはありません。このように多くの方法論に依拠する研究者や多様な関心を持つ人々が集まれば、そこには自ずと総合性が意識されるようになります。これは本学会の設立当初からの財産の一つだと思います。

第2に、学会活動の国際性です。これについては「アジア中東学会連合 (AFMA)」や「世界中東学会大会 (WOCMES)」に積極的に参加するという、本学会の国際交流の伝統があります。2018年度は北京とセビアにて大会が予定されており、日本中東学会もこれまで同様、あるいはそれ以上に深くかかわることを望んでいます。また、個々の会員が海外での会議に報告に出かけたり、国内で国際会議を開催したりする機会は、近年ますます増えています。一方で、先ほど第2のチャレンジとしてふれたことにつながりますが、中東現地との交流をいかに維持し、発展させていくか、今が踏

ん張りどころだと思います。

第3に、中東学会の「中東」という言葉の伸縮自在性・仮設性を自覚しながら、縮むほうではなく、伸ばす方向で、いわば積極的に拡大解釈して学会の幅を広げてゆくことです。本学会の会員は専門分野が多様なだけでなく、ヨーロッパやラテンアメリカ、東南アジアや東アジアといった、世間の常識的な理解からすると、中東に含まれないとされる地域の専門家も、多数いらっしゃいます。こうした会員をもっと増やすことが重要です。また本学会は研究者や学生だけではなく、NGO 関係の実務家をはじめ、ジャーナリストや外交官、国際的なビジネスや芸術の舞台で活躍される方々など、中東に関心のある方ならばいつでも入会して頂けるという、市民社会に広く開かれた性格を持っております。この開放性をさらに高める努力が求められています。

そのためには会員を増やしていくのが早道です。近年、会員数が約700人で頭打ちになっている感があります。皆様の周りに中東に関心をお持ちの人々は多数いらっしゃると思います。入会に向けて積極的にお声がけをして勧誘し、中東学会版の「デアワ運動」を展開しようではありませんか。

ネット上には、日本のベリーダンス人口は10万人を超えている、との情報があります。こうした形で中東に関心をもつ人々が広がっていることは心強い限りです。中東の音楽・映画や食文化に対する関心も、本学会発足時に比べれば、はるかに高まっていると思います。

会員の皆様におかれましては、本年度中に一人でも多くの新入会員を獲得されますようお願い申し上げます。御挨拶の言葉に代えさせていただきます。

理事会・総会報告

【電子的手段による理事会（2017年5月10日決議）】

寄付による「片倉もとこ研究奨励基金」について、2017年度の第6回から2025年度の第10回までの授賞に「日本中東学会奨励賞基金」の一部に含まれている同基金を充てることとし、毎回授賞式に際して口頭で「片倉もとこ研究奨励基金」からの奨励金である旨を出席者に伝え、ニューズレターにも明記して、故片倉もとこ元会員の貢献に深甚の謝意を表することとする。

【2017年度第1回理事会】

日時：2017年5月13日（土） 10:00～12:30

場所：九州大学箱崎キャンパス文系地区共通講義棟106号室

出席者：赤堀雅幸、粕谷元、勝沼聡、栗田禎子、黒木英充、近藤信彰、桜井啓子、末近浩太、東長靖、長沢栄治、保坂修司、森本一夫、森山央朗、山岸智子、山口昭彦、横田貴之

欠席者：大稔哲也（委任状あり）

[議題]

1. 2016 年度事業報告・2016 年度決算報告を承認した（詳細は総会議事録を参照）。
2. 2017 年度事業計画・2017 年度予算案を承認した（詳細は総会議事録を参照）。
3. 2017 年度公開講演会の開催企画について、原案を一部修正の上承認した。
4. 30 周年記念冊子の刊行と配付の是非について議論し、経緯を明らかにして 2018 年度開催の第 34 回年次総会に諮ることとした。
5. 学会ウェブサイトの改修について今年度から重点的に取り組むことを承認した。
6. AFMA（アジア中東学会連合）ウェブサイトの維持更新について、近々に加盟他学会に取り扱いについて諮ることとした。
7. AJAMES 編集について資料に基づいて報告と説明があり承認した。
8. 総会資料を確認した。
9. 第 17 期監事の総会への推薦候補を承認した。
10. 会員動向について報告があり承認した。
11. 第 5 回 WOCMES（中東研究世界大会）に向けて JAMES パネルを組むべく、会員に呼びかけ、外部資金獲得を目指すことを承認した。
12. 会費前年度払い制度の廃止について議論し、継続審議とした。

【日本中東学会第 32 回年次総会報告】

日時：2017 年 5 月 13 日（土） 17:00～18:30

会場：九州大学箱崎キャンパス文系地区共通講義棟 101 教室

出席：当日出席者 66 名、委任状提出 176 名、計 242 名

（会員総数 708 名に対する総会定足数 5 分の 1（142 名）を満たしたことにより、総会成立）

1. 司会および総会役員を選出

清水学会員の司会により、議長として吉村慎太郎会員、書記として柳谷あゆみ、大塚修両会員、議事録署名人として橋爪烈、石黒大岳両会員を選出した。

2. 2016 年度事業報告および決算

第 16 期各担当理事より、総会資料に基づく報告があった。

(1) 事業報告（報告：森山央朗前事務局長）

- ・ 第 32 回年次大会を、2016 年 5 月 14～15 日に、慶應義塾大学三田キャンパスにおいて開催した。
 - ・ 公開シンポジウム「インド洋海域史研究の現在」
 - ・ 研究発表 8 部会 50 本、企画セッション 3 本。
 - ・ 韓国中東学会から KIM Jong Do 会長と KIM Suwan 事務局長を招待した。

- ・ 日本中東学会年報（AJAMES）第 32-1 号、第 32-2 号の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行った。
- ・ 海外研究機関他、国内外寄贈先への発送を行った。
- ・ 国立情報学研究所論文情報ナビゲータ（CiNii）上で公開されるよう手配した。
- ・ 2016 年 11 月 20 日に第 22 回公開講演会「観光：イスラーム世界の新しいライフスタイル」をバロー文化ホール（多治見市文化会館、岐阜県多治見市）において、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「研究成果公开发表」の助成を受け、多治見国際交流協会との共催によって開催した。
- ・ 海外の関連学会との交流を促進した。
 - ・ 第 32 回年次大会に、韓国中東学会から KIM Jong Do 会長と KIM Suwan 事務局長を招待した。
 - ・ 2016 年 9 月 23～24 日に、ウランバートル・ホテル（モンゴル国ウランバートル市）を主会場として開催された、第 11 回 AFMA（アジア中東学会連合）大会、World New Trends in the 21st Century and Middle East に、日本中東学会から理事 2 名（東長靖会長、森山央朗事務局長）と会員 10 名が参加し、森山事務局長を除く 11 名が研究発表を行った。なお、参加会員 10 名のうち 5 名に対して、学会から参加のための経済的支援を行った。
 - ・ 2016 年 12 月 3 日に、韓国外国語大学（大韓民国ソウル市）で開催された韓国中東学会主催の国際会議、Middle East at the Transitional Stage, Its Role and Status in Accordance with Change Global Order に、森山央朗事務局長が招待され研究発表を行った。
- ・ ニュースレター和文 4 回（総頁 84 頁）を発行した。第 143 号（2016/4/25、15 頁）、第 144 号（7/10、年次大会特集、39 頁）、第 145 号（11/25、13 頁）、第 146 号（2017/2/25、17 頁）。
- ・ 「日本における中東研究文献データベース 1989-2016」につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開した。
- ・ 学会ウェブサイトおよび会員メーリングリストによる広報を行った。
- ・ 地域研究学会連絡協議会の参加組織として、地域研究の興隆を図るとともに、参加組織の相互交流に努めた。
- ・ 第 17 期評議員及び理事選挙を実施した。
- ・ 会員の増減：2016 年度中には入会者 28 名、退会者 30 名（自主退会 19 名、会費未納による強制退会 11 名）、復会者 1 名の異動があった。その結果、2017 年 3 月 31 日現在の会員数は 708 名（正会員 526 名／うち海外在住 16 名；学生会員 182 名／うち海外在住 5 名）となった。
- ・ 日本中東学会奨励賞の選考を行った。

(2) AJAMES 第 32-1 号、第 32-2 号編集報告（粕谷元前編集委員長）

- ・ AJAMES 第 32-1 号、第 32-2 号がそれぞれ 2016 年 7 月と 2017 年 2 月に刊行された。
- ・ 第 32-1 号では、論文 5 本（日本語 4 本、英語 1 本）、博論要旨 1 本が掲載された（投稿総数 11 本）。
- ・ 第 32-2 号では、特集 *Sharia Courts and the Imperial Ruling System* 論文 3 本（すべて英語）、研究ノート 2 本（日本語 1 本、英語 1 本）が掲載された（投稿総数 10 本）。
- ・ 平成 29 年度科研費（研究成果公開促進費・国際情報発信強化 B）「アジアにおける中東研究のリーディングジャーナルとしての『日本中東学会年報』の国際情報発信強化」を申請し、採択された（期間 5 年。年額 250 万円）。

(3) 2016 年度決算報告（報告：森山央朗前事務局長）

- ・ 年会費収入が予算を大幅に上回った。原因は、2015 年度に事務局移転などの事情で年会費の督促を十分にできず納入率が低下、その分の督促の努力の結果した結果、例年よりも多くの年会費が振り込まれたためである。
- ・ 支出の錯誤振込返金は、年会費を督促した際、誤って多く振り込んだ会員がおり、多く振り込んだ分を返金したものである。
- ・ 支出の国際発信強化費（海外派遣）は、第 11 回 AFMA 大会の際の旅費支援のために使用した。
- ・ 支出の AJAMES 国内発送費は、業者に値引きしてもらった結果、大幅に支出を抑えることができた。
- ・ 支出の AJAMES 海外発送費は、前年度を予定していた第 31-2 号の発送が遅れ、2016 年度会計で発送を行なったため、計 3 号分の発送を行なったために、予算を超過した。
- ・ 支出の諸雑費は、AJAMES の在庫を配布した時に生じた経費である。
- ・ 全体として予算に対し支出を大幅に抑えることができた。

(4) 監査報告（報告：末近浩太監事）

- ・ 2017 年 5 月 10 日に学会事務局（同志社大学）にて、2016 年度の会計監査を行った結果、適正に執行されたことを確認した。

<質疑応答>なし

<採決>以上の 2016 年度事業報告および決算報告について、総会はこれを承認した。

3. 第17期役員選挙報告および理事の任務分掌、監事の選出

(1) 第17期役員選挙報告（末近浩太選挙管理委員）

- ・ 評議員選挙については、2017年2月11日開票の結果、有権者数395名のうち、投票者数143名（うち有効票119、無効票22、白票2）、投票率は36.2%であった。学会細則VIII-2により、第17期の評議員58名を選出した。
- ・ 評議員選挙に続き、新評議員による理事選挙が行われ、2017年3月6日開票の結果、理事15名が選出された。なお、理事選挙にあたり、会則第9条の規定により、飯塚正人会員、林佳世子会員は被選挙権を保有しないため、予め理事候補より除外された。投票数36（うち有効票36、無効票0、白票0）、投票率は62.1%であった。

(2) 特任理事の選出および理事の任務分掌報告（勝沼聡事務局長）

- ・ 勝沼聡会員の事務局長就任に伴い、同会員が特任理事として選出された。また、横田貴之会員が特任理事として選出された。
- ・ 2017年4月5日（水）に第16期・第17期合同理事会が東京大学東洋文化研究所で開催され、役職・理事業務の報告と引き継ぎが行われ、同日同所で開催された第17期新理事会において、会長と事務局長、理事の任務分掌、および監事が選出された。
- ・ 会長：黒木理事、AJAMES 編集委員会：近藤理事（編集長）・粕谷理事（副編集長）・横田理事、国際交流委員会：東長理事（委員長）・栗田理事・末近理事・山岸理事、企画担当：桜井理事・森本理事、ニューズレター・書記担当：赤堀理事、ホームページ担当：保坂理事、年次大会担当：山口理事、渉外担当：大稔理事、財務・会則担当：長澤理事、総務担当：森山理事

(3) 監事の選出（勝沼聡事務局長）

- ・ 鈴木均、太田啓子の両会員が選出された。

<質疑応答>なし

<採決>以上について、総会はこれを承認した。

4. 2017年度事業計画および予算

第17期各担当理事より、総会資料に基づく報告があった。

(1) 2017年度事業計画（報告：勝沼聡事務局長）

- ・ 第33回年次大会を2017年5月13～14日に、九州大学箱崎キャンパスにおいて開催する。
- ・ 学会事務局を同志社大学から慶應義塾大学へ移転する。

- ・ 日本中東学会年報 (AJAMES) 第 33-1 号 (2017 年 7 月)、第 33-2 号 (2018 年 1 月) の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行う。刊行にあたり、科学研究費補助金 (研究成果公開促進費) 「国際情報発信強化」の助成を受ける。
 - ・ 第 23 回公開講演会「中東の戦争と平和：ヒロシマから考える」を 2017 年 9 月 30 日に広島国際会議場 (広島県広島市) で開催する。
 - ・ ニューズレターを年数回発行する。年次大会報告号は紙媒体で発行する。

 - ・ 「日本における中東・イスラーム研究文献データベース 1989-2017」につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開する。
 - ・ 学会ウェブサイトおよび会員メーリングリストによる広報を行う。
 - ・ 海外の関連学会との交流を促進する。
 - ・ 第 33 回年次大会に、韓国中東学会から CHOE Yong-Chol 会長と KIM Suwan 理事を招待する。
 - ・ 2017 年度韓国中東学会国際会議に理事数名を派遣する。
 - ・ 2018 年度にスペインで開催予定の WOCMES 参加に向けて準備を開始する。
 - ・ 地域研究学会連絡協議会の参加組織として相互交流に努め、地域研究の興隆を図る。
 - ・ 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取りつつ必要な活動を行う。
 - ・ 2017-2018 年度会員名簿を刊行する。
 - ・ 日本中東学会創設 30 周年記念冊子を刊行する。
 - ・ 栗田会員より記念冊子の内容及び進行について追加説明が行われた。
- (2) AJAMES 第 33-1 号、第 33-2 号編集計画、2017 年度編集体制 (報告：近藤信彰編集委員長)
- ・ 現在、第 33-1 号の刊行準備を進めており、7 月に刊行予定である。(投稿総数 7 本、掲載 4 本)
 - ・ 第 33-2 号は 2017 年 6 月 1 日に投稿を締め切り、2018 年 1 月に刊行予定である。
 - ・ 2017 年度の編集体制として 3 名の編集委員の交代があった。
 - ・ 抜刷 PDF 化について今年度から実施する予定である。
 - ・ CiNii から J-STAGE への移行に応じて、AJAMES オープンアクセス化の準備を進めている。
- (3) 2017 年度予算案 (報告：勝沼聡 事務局長)
- ・ 収入のうち、科学費公開講演会助成金および NII-ELS 著作権料が削除された。
 - ・ 支出のうち、事務局費を昨年度より 27 万円増額した。これは、アルバイト謝金増額と事務局移転に係る経費増加に伴うものである。
 - ・ 支出のうち、大会会場費は九州大学では会場費が必要となるため計上した。
 - ・ 30 周年記念冊子作成印刷費を計上した。
 - ・ 支出のうち、ウェブサイト改修費 200 万円はセキュリティを主眼とした全面改修

を行うための費用である。

- ・ ニュースレター等発行費の増額は、今年度発行される名簿作成費が含まれるためである。
- ・ AJAMES 国内発送費は昨年度にあわせて減額した。
- ・ インターネット広報費の増額は、AJAMES のオープンアクセス化のためである。

<質疑応答>

(質問) ウェブサイト改修費 200 万円は妥当な金額か。

(保坂理事) 20 年間改修なしだったことを踏まえ、全面改修を行う。改修に 150 万、セキュリティに 30 万との業者見積りを得ており、また Facebook 等との連携等も考慮してこの金額としている。今後、相見積りを取る等により減額の可能性もある。

(質問) 年次大会時託児所特別基金について、2017 年度予算案と 2016 年度決算案とで繰越金金額が異なる。

(森山理事) 事務局移転により混乱が生じているが、2016 年度決算案の金額が正しい。2016 年度決算案の数字に合わせて修正する。

(質問) 年次大会に係る特別基金について、2017 年度予算案（試算）と 2016 年度決算案で利子の金額も異なる。

(司会・吉村会員、赤堀理事、飯塚理事) ご指摘を踏まえ、前年度決算案に合わせ利子を 10 円とする。これらを勘案し、託児所特別基金について 2016 年度繰越金は 531,260 円、2018 年度繰越金は 461,270 円、合計 581,270 円と修正する。大会特別基金は 2016 年度繰越金が 592,603 円、利子は 10 円、2018 年度繰越金 592,613 円、合計 692,613 円と修正する。

<採決>以上の 2017 年度事業計画案および予算案について、総会はこれを承認した。

5. 会長挨拶（黒木英充会長）
6. 議事終了につき、議長の吉村慎太郎会員が降壇し、司会の清水学会員により閉会が宣言された。

2016年度決算

本会計

収入	16年度予算	16年度決算
2015年度よりの繰越金	13,183,299	13,183,299
年会費	3,895,300	8,850,000
正・学生会員	3,795,300	8,750,000
2013年度以前分	101,850	125,000
2014年度分	134,100	185,000
2015年度分	459,000	1,150,000
2016年度分	1,858,350	3,695,000
2017年度分	1,242,000	3,480,000
2018年度以降分	0	115,000
賛助会員	100,000	100,000
その他	3,460,236	3,535,534
科研費公開講演会助成金	500,000	500,000
科研費国際情報発信強化助成金	2,500,000	2,500,000
利子	500	26
AJAMES販売代金	250,000	325,772
海外郵送料実費	0	0
AJAMES広告費	0	0
NII-ELS著作権料	209,736	209,736
収入合計	20,538,835	25,568,833

(単位:円)

2017年度への繰越金内訳		19,531,177
郵便振替口座		17,989,086
三井住友銀行口座		1,394,328
Paypal口座		124,599
現金		23,164

(単位:円)

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2015年度よりの繰越金	584,439	
本会計より繰り入れ	50,000	
利子	3	
第32回大会託児所運営費		102,750
振込手数料		432
2017年度への繰越金		531,260
合計	634,442	634,442

(単位:円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2015年度よりの繰越金(片倉もとこ研究奨励基金を含む)	2,105,349	
奨励金		0
利子	188	
2017年度への繰越金		2,105,537
合計	2,105,537	2,105,537

(単位:円)

支出	16年度予算	16年度決算
事務局費	1,590,000	1,598,841
アルバイト謝金	1,100,000	1,183,500
通信費	60,000	98,968
消耗品費	80,000	37,781
会議費	30,000	26,838
交通費	150,000	82,370
振込手数料	20,000	25,704
事務局備品費	50,000	0
事務局移転費	0	0
資料保管費	100,000	103,680
錯誤振込返金	0	40,000
事業費	6,230,000	4,438,815
大会開催費	400,000	400,000
大会会場費	100,000	0
AJAMES編集費	200,000	81,650
同欧文校閲費	650,000	191,176
同印刷製本費	2,100,000	1,618,210
編集委員会旅費	150,000	144,630
AJAMES宣伝費	20,000	0
国際発信強化旅費(海外招聘)	150,000	193,115
国際発信強化旅費(海外派遣)	830,000	356,790
国際交流費	150,000	92,564
ニューズレター等発行費	100,000	80,300
NL発送費	60,000	58,914
AJAMES国内発送費	300,000	129,931
AJAMES海外発送費	130,000	252,922
選挙費用	150,000	132,436
インターネット広報費	35,000	36,072
公開講演会開催費	500,000	504,808
中東・イスラーム文献DB更新費	100,000	100,000
地域研究会協議会分担金	5,000	0
年次大会特別基金への繰り入れ	0	0
託児所特別基金繰り入れ	50,000	50,000
雑費	50,000	15,297
支出合計	7,820,000	6,037,656
2017年度への繰越金	12,718,835	19,531,177
総計	20,538,835	25,568,833

(単位:円)

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2015年度よりの繰越金	590,522	
利子	4	
本会計よりの繰り入れ	0	
大会実行委員会余剰金	2,077	
2017年度への繰越金		592,603
合計	592,603	592,603

(単位:円)

2017年度予算

本会計

収入	16年度予算	17年度予算
2015年度よりの繰越金	13,183,299	—
2016年度よりの繰越金	—	19,531,177
年会費	3,895,300	6,914,400
正・学生会員	3,795,300	6,814,400
2013年度以前分	101,850	—
2014年度以前分	134,100	168,000
2015年度分	459,000	401,500
2016年度分	1,858,350	889,100
2017年度分	1,242,000	1,665,300
2018年度分	—	3,690,500
賛助会員	100,000	100,000
その他	3,460,236	2,750,050
科研費公開講演会助成金	500,000	0
科研費国際情報発信強化助成金	2,500,000	2,500,000
利子	500	50
AJAMES販売代金	250,000	250,000
海外郵送料実費	0	0
AJAMES広告費	0	0
東洋文庫連携事業分担金	0	0
NII-ELS著作権料	209,736	0
収入合計	20,538,835	29,195,627

(単位:円)

(参考)各年度正・学生会員会費未納額および納付率

年度	未納額	前年度(2016年度)納付率
2013年度分		25%
2014年度分	560,000	25%
2015年度分	550,000	68%
2016年度分	1,070,000	78%
2017年度分	2,730,000	56%
2018年度分	6,050,000	
合計	10,960,000	

上の表の見方は以下の通り

未納額:本年度予算策定時点で在籍している会員の会費未納額

前年度納付率:予算策定年度の前年度(たとえば2017年度予算であれば2016年度)決算における会費納付額÷前年度予算に書かれている未納額

*2017年度予算に書かれている各年度(2014~2018年度)の年会費収入予算は、各年度分の会費未納額(上記)に、その前年度分会費の2016年度における納付率(=2016年度決算における会費納付額÷2016年度予算に書かれている未納額)に5%を足した値を掛けることによって算出して

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2016年度よりの繰越金	531,260	
本会計より繰り入れ	50,000	
利子	10	
第33回大会託児所運営費		120,000
2018年度への繰越金		461,270
合計	581,270	581,270

(単位:円)

支出	16年度予算	17年度予算
事務局費	1,590,000	1,860,000
アルバイト謝金	1,100,000	1,200,000
通信費	60,000	60,000
消耗品費	80,000	80,000
会議費	30,000	30,000
交通費	150,000	150,000
振込手数料	20,000	20,000
事務局備品費	50,000	150,000
事務局移転費	0	70,000
資料保管費	100,000	100,000
事業費	6,230,000	9,080,000
大会開催費	400,000	400,000
大会会場費	100,000	200,000
AJAMES編集費	200,000	300,000
同欧文校閲費	650,000	550,000
同印刷製本費	2,100,000	2,100,000
編集委員会旅費	150,000	150,000
AJAMES宣伝費	20,000	0
30周年記念冊子作成印刷費	—	450,000
ウェブサイト改修費	—	2,000,000
国際発信強化旅費(海外招聘)	150,000	200,000
国際発信強化旅費(海外派遣)	830,000	400,000
国際交流費	150,000	150,000
ニューズレター等発行費	100,000	250,000
NL発送費	60,000	60,000
AJAMES国内発送費	300,000	150,000
AJAMES海外発送費	130,000	300,000
選挙費用	150,000	0
インターネット広報費	35,000	285,000
公開講演会開催費	500,000	830,000
中東・イスラーム文献DB更新費	100,000	100,000
地域研究会協議会分担金	5,000	5,000
年次大会特別基金への繰り入れ	0	100,000
託児所特別基金繰り入れ	50,000	50,000
諸雑費	50,000	50,000
支出合計	7,820,000	10,940,000
2017年度への繰越金	12,718,835	
2018年度会費分留保		3,690,500
2018年度への繰越金		14,565,127
総計	20,538,835	29,195,627

(単位:円)

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2016年度よりの繰越金	592,603	
第33回年次大会運営費		100,000
利子	10	
本会計よりの繰り入れ	100,000	
2018年度への繰越金		592,613
合計	692,613	692,613

(単位:円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2016年度よりの繰越金(片倉もとこ研究奨励基金を含む)	2,105,537	
奨励金(片倉基金より)		200,000
利子	112	
2018年度への繰越金		1,905,649
合計	2,105,649	2,105,649

(単位:円)

第 33 回年次大会報告

【プログラム】

第 1 日：2017 年 5 月 13 日（土） 九州大学箱崎キャンパス文系地区共通講義棟
公開シンポジウム

『元寇』とイスラーム：モンゴル帝国の拡大がもたらした社会変革と中東

船田善之（広島大学・モンゴル帝国史）

「モンゴルの征服と統治：遊牧国家から世界帝国への変貌？」

堀本一繁（福岡市博物館・日本中世史）

「蒙古襲来と異国警固体制」

中町信孝（甲南大学・マムルーク朝史）

「アラブが見た『モンゴル襲来』：アイン・ジャールートから IS まで」

渡部良子（東京大学・イルハン朝史）

「イランにおける『モンゴル襲来』：モンゴルによる統治の受容とイメージの変遷」

日本中東学会総会

第 6 回日本中東学会奨励賞授与式

懇親会（九大生協・中央食堂）

第 2 日：2017 年 5 月 14 日（日） 九州大学箱崎キャンパス文系地区共通講義棟
企画セッション（1～4）・個人研究発表（第 1～第 8 部会）

【企画セッション】

企画セッション 1：

「イスラーム・ジェンダー学の未来：セクシュアリティにみる国家・宗教・ジェンダー」

モデレーター：後藤絵美（東京大学）

保井啓志（東京大学・院）「愛国主義・排外主義と性的少数者：イスラエルを事例に」

澤口右樹（東京大学・院）「イスラエル国防軍の女性兵士：宗教と世俗の狭間で」

鳥山純子（日本学術振興会特別研究員）「生殖に関わるカイロの大衆言説に見るイスラーム、国家、セクシュアリティ」

ディスカッサント：村上薫（アジア経済研究所）

企画セッション 2：「望ましいアラビア語教科書とは：教授法の見地から」

企画・司会：榮谷温子（慶應義塾大学）

近藤久美子（大阪大学）「アラビア語の文法履修：国内外の教科書の事例から」

岡崎英樹（四天王寺大学）「外国語教授法の変遷からみた Elementary Modern Standard Arabic」

榮谷温子「第二言語の項目の習得順序やその難易」

コメンテーター：竹田敏之（京都大学）

企画セッション3 : "Toward Multilayered Relations between the Gulf and Asia"

Organizer: NAKAMURA Satoru (Kobe University, Japan)

Moderator: Abdullah BAABOOD (Qatar University)

Steven WRIGHT (Qatar University) "The Impact of the Changing East-Asian LNG Market on Qatar's Energy Policy"

NAKAMURA Satoru "Challenge of Japan to Build Multilayered Relation with Qatar"

HORINUKI Koji (The Institute of Energy and Economics, Japan) "The Japan-UAE Relationship: Focus on the Role of Friendship Association"

Discussants: YOKOTA Takayuki (Meiji University, Japan), Abdullah BAABOOD

企画セッション4 :

"Saudi Arabia Paths towards New Moderation and Future Measures in 2030 under the Current Political Turmoil"

Chairperson: Essam BUKHARY (King Abdul Aziz University, Saudi Arabia)

Alhasan ALMANAKHRAH (Prince Khalid Al-Faisal Center for Moderation, Saudi Arabia)
"Saudi Arabia, Extremist Measures, and Moderation in 2030 Vision"

Tariq ELYAS (King Abdul Aziz University, Saudi Arabia) "Examining New Media Usage in Compacting Extremism Behavior and Attitude in Saudi Arabia"

Almaddah AMR (King Abdul Aziz University, Saudi Arabia) "Dealing with the Ugly Face of Social Media and Digital Crimes: The Case of Saudi Arabia"

【個人研究発表】

第1部会

CHOE Young-chol (Seoul Jangsin University, KAMES) "Gush Emunim: It's Definition of Land of Israel and Settlement Movement"

KIM Suwan (Hankuk University of Foreign Studies, KAMES) "An Exploratory Study on the Development of Muslim Tourism Market in Korea"

SATO Noriko (Pukyong National University, Korea) "Constructing Ethnic Identity among the Syriac Orthodox Christians in North-Eastern Syria under the Syrian Civil War"

Qolamreza NASSR (Hiroshima University, Japan) "Movements toward Democracy in Iran: Reciprocal Influence of Ulama and Intellectuals"

Scott MORRISON (Middlesex University, UK) "Islamic Banking in the Islamic Republic of Iran"

第2部会

森山央朗 (同志社大学) 「10-12 世紀におけるホラーサーン系『ハディースの徒』の理論展開と自己認識」

篠田知暁 (日本学術振興会特別研究員) 「18 世紀フェズの都市社会におけるマジューズーブ」

中町信孝 (甲南大学) 「イブン・アイニーの生涯：武人か文人か？」

- 橋爪烈 (千葉科学大学) 「ルトフィー・パシヤのカリフ論: その思想的背景について」
徳永佳晃 (東京大学・院) 「17 世紀後半におけるサファヴィー朝・ムガル朝関係の
転換: カンダハール地方をめぐる両朝の係争に着目して」
朝田郁 (京都大学) 「ハドラー移民の生きる世界: インド洋西海域を旅したアラブ
の軌跡」
近藤信彰 (東京外国語大学) 「サファヴィー朝期イラン法廷制度再考」

第3部会

- 秋葉淳 (千葉大学) 「ディーワーンと法廷: 18 世紀オスマン帝国の地方における司
法行政」
岩本佳子 (日本学術振興会特別研究員) 「参照資料としての租税台帳: オスマン朝行
政における 17 世紀以降の租税台帳の活用に関する考察」
佐治奈通子 (東京大学・院) 「15-16 世紀におけるオスマン朝の鉾山経営: クラトヴァ
鉾山の請負台帳の分析から」
永島育 (早稲田大学・院) 「アブデュルハミト二世時代におけるオスマン語の地理叙
述について」
宇野陽子 (津田塾大学) 「トルコにおける女性参政権の導入: 議会・運動・国際関係
の視点から」
幸加木文 (千葉大学) 「2016 年クーデタ未遂事件が示すトルコの『イスラーム派』
の変動」
今井宏平 (日本貿易振興機構アジア経済研究所) 「シリア難民の定住に向けた一考
察: トルコの過去の難民受け入れとの比較研究」

第4部会

- 縄田浩志 (秋田大学) 「黒サンゴ製の数珠 “sibhat al-yusr” の特質について」
池田昭光 (東京外国語大学) 「宗派主義的社会と相互行為: レバノンのフィールド
ワーク資料の例から」
佐藤麻理絵 (日本学術振興会特別研究員) 「現代ヨルダンにおけるホスト社会形成:
レジティマシーをめぐる一考察」
千坂知世 (大阪大学・院) 「イラン対外政策決定過程における国会の役割: 第9期国
会による JCPOA の履行承認を事例として」
臼杵悠 (一橋大学・院) 「移住がつくる国家ヨルダン: 人口センサスと世帯調査から」
小島宏 (早稲田大学) 「西欧ムスリム移民二世におけるコーラン教室通学と宗教的食
事制限」

第5部会

- 鷺見朋子 (京都ノートルダム女子大学)、鷺見克典 (名古屋工業大学) 「アラビア語集
中講座合宿: アラビア語学習の動機づけ向上を目指した講座の概要とその効果」
アブドラー・アルモーメン (東海大学) 「日ア語の視点と表現の違い: 発想と表現を

めぐって」

竹田敏之（京都大学）「インターネット時代における湾岸メディアを通じた現代アラビア語の多様化とその展望」

相樂悠太（東京大学・院）「イブン・アラビーによる『心が神を含む』という神聖ハディース解釈：先行スーフイーとの比較を通じて」

大瀨久志（東京大学・院）「ファフルッディーン・ラーズイーの天使論と倫理思想」

早川英明（東京大学・院）「マフディー・アーミルの思想における国家と宗派主義の関係」

桐原翠（京都大学・院）「ハーシム・カマーリーの現代イスラーム思想：ウンマ論とワサト主義を中心に」

第6部会

清水学（前帝京大学）「グローバル化・金融化のなかの中東経済」

岡室美恵子（NPO 研修・情報センター）「ヨルダンの輸出構造分析」

安田慎（帝京大学）「イスラミック・ホスピタリティ論再考：アダブ文献におけるディヤーフア・サファルをめぐって」

竹村和朗（日本学術振興会特別研究員）「ワクフは所有権か：古典学説と現代エジプト法制の比較検討から」

池邊智基（京都大学・院）「労働の教義と実践：セネガル・ムリッド教団のバイファル」

須永恵美子（京都大学）「『人間の経済的問題とそのイスラーム的解決策』の出版に関する一考察：マウドゥーディーによる近代イスラーム経済学の始まりと初期の思想」

第7部会

今野泰三（大阪市立大学）「『グリーンラインのイデオロギー』への批判としての『入植地問題』研究の展望」

金城美幸（日本学術振興会特別研究員）「パレスチナ亡命以前のムハンマド・アミン・アル＝フサイニーの軌跡：委任統治下の『政治』と『宗教』の序列」

児玉恵美（東京外国語大学・院）「レバノンのパレスチナ解放運動：難民キャンプにおける動員と参加から」

山本健介（京都大学・院）「エルサレムと聖地ハラム・シャリーフ／神殿の丘の帰属問題：オスロ合意以降のパレスチナ人の政治とヨルダンの関与をめぐって」

鈴木啓之（日本学術振興会特別研究員）「『無名』パレスチナ人の回顧録刊行：中東現代史を見る新たな資料としての考察」

池端蒨子（京都大学・院）「ウンマ・汎イスラーム主義・国民国家：OIC 研究序論」

第8部会

岡井宏文（早稲田大学）「在日イスラーム団体の形成と諸活動の展開：タブリーギー・ジャマーアトと多文化的状況に注目して」

子島進 (東洋大学) 「ボランティア活動を通して見えてくるイスラームの価値観：比較文化論の視点から」

リーム・アハマド (カイロ大学) 「エジプト人の日本発見：ジルジャーウィーとムハンマド・アリー公の『日本旅行記』」

岡崎弘樹 (独立研究者) 「シリアの記録映画にみる政治的、社会的矛盾の表象：オマル・アミララーイの農村三部作を通して」

外山健二 (山口大学) 「アメリカ文学のイスラーム：第一次報告」

【公開シンポジウム報告】

日本中東学会第 33 回年次大会は予定の日程を無事終了いたしました会員の皆様におかれましては、大会開催への篤いご協力をいただき誠にありがとうございました。おかげさまで、九州博多という土地にもかかわらず多数の方々のご参加をいただき、盛況のうちに大会を終えることができました。予想を超える多数の方々のご参加に大変感謝しております。

初日の公開シンポジウムは『元寇』とイスラーム：モンゴル帝国の拡大がもたらした社会変革と中東』と題して、モンゴル軍襲来の地である博多にちなんだ企画を用意しました。マムルーク朝史の中町信孝会員 (甲南大学)、イルハン朝史の渡部良子会員 (東京大学) に加え、モンゴル帝国史の船田善之氏 (広島大学)、モンゴル襲来絵詞の専門家である堀本一繁氏 (福岡市博物館) という中東研究の分野外の方々もお招きして、中東から日本に至る同時代的な世界変動の体験の意味とあり方について議論を行いました。会場の箱崎キャンパス周辺は、まさしくモンゴル軍に対抗する日本側の武士団の集結地であったことも紹介され、フロアからも、モンゴル襲来が中東と日本に与えた国政の変化のあり方に関する質問や、モンゴル時代を世界史の劃期ととらえる見方の再評価に関する質問などが出されました。中東学会としては異例のシンポジウムだったかと思いますが、学会員の方々ばかりでなく、30 名におよぶ一般参加者もお迎えして、興味深い学問の場を用意することができたように思います。

今回は、九州における初の日本中東学会開催となりましたが、なんとか重責を果たすことができたのではないかと考えております。重ねまして、これも学会員の皆様、そして黒木会長はじめ理事の方々のお力あってこそのことです。本当にありがとうございました。
(清水和裕 大会実行委員会委員長)

【研究発表会場から】

企画セッション 1：イスラーム・ジェンダー学の未来：セクシュアリティにみる国家・宗教・ジェンダー

本セッションは、2016 年 4 月に始動した「イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的総合的研究」(通称「IG 科研」) に参画する (比較的) 若手の研究者によって構成されたものである。目的は、セクシュアリティという、従来、国家や宗教とは別に扱われてきた事象に着目することで、国家・宗教・ジェンダーの重層的な実態の一端を明らかにすることである。

最初の報告者の保井啓志氏は、一つの国家の中にある性的少数者への寛容な姿勢とムスリムに対する攻撃や排除という、方向性の異なる二つの動きの関係性を、クィア理論の展開とイスラエルによるピンクウォッシング（LGBT等に対し寛容な国であるというイメージ戦略）の事例を通して描き出した。二番目の報告者である澤口右樹氏は、イスラエル国防軍の女性兵士の存在や経験に光をあてる中で宗教勢力の多様性と「世俗」と呼ばれるものの実態を明らかにし、同国が「世俗派と宗教派という対立状況の中にある」という従来の見方に対し、両者はむしろ一致していると述べた。最後の報告者である鳥山純子氏は、生殖補助医療をめぐるエジプト・カイロの人々の語りを題材に、セクシュアリティ実践を支えるものが、（従来言われてきたように）宗教ではなく、人々の欲望であったという可能性を提示した。

以上の報告に対し、村上薫氏からは、各報告のキーワード（性的マイノリティ、軍、生殖）と「国家」をつなげるものとして、**citizen**（市民＝望ましい国民）という概念があること、それこそがセクシュアリティへの国家の介入を正当化するために用いられてきたことが指摘された。フロアからは、三人の報告者の用いる「セクシュアリティ」という用語の不統一についての質問や、人々がそれぞれ抱く「**respectable** な市民になりたい」という欲望を国家が利用するという側面があるのでは、というコメントなどがあつた。「イスラーム・ジェンダー学の未来」に可能性と希望を持ちうるような充実した二時間であった。（後藤絵美）

企画セッション2：望ましいアラビア語教科書とは：教授法の見地から

近藤久美子氏による第1報告「アラビア語の文法履修：国内外の教科書の事例から」では、文法項目履修の順序を、国内外の教科書11冊について調査した中で特に **Elementary Modern Standard Arabic (EMSA)** と **Al-Kitaab fii Ta'allum al-'Arabiyya** について、氏自身が両者を授業で使用した体験に基づき、そのメリットとデメリットについて報告した。

岡崎英樹氏による第2報告「外国語教授法の変遷からみた **Elementary Modern Standard Arabic**」では、**Audio-lingual Method** 全盛の時代に編集が進められた **EMSA** の意義を考察した。また、**ダイグロシヤ**の実態をふまえ、**An Alternative Approach**（正則語と口語の2本立てで教える）や **The Integrated Approach**（正則語と口語を統合して教える）についても言及された。

榮谷による第3報告「第二言語の項目の習得順序やその難易」では、第二言語習得論一般の観点から、習得順序や学習項目の難易に関する理論の変遷を述べ、**Eckman** の「有標性差異の仮説」を中心に、有標的項目は無標的項目より習得が困難との調査結果をいくつか挙げ、アラビア語教育への応用を考えた。

竹田敏之氏からは、自らの学習者として、また教師としての実体験から具体的なコメントがなされた。特に、言語習得の順序に関しては、やはり母語にない要素は習得が難しいことが多く、有標性理論単一での説明だけでは足りないことが示唆された。

会場からは、日本のアラビア語教育の歴史は決して短くないにも関わらず、日本語話者のエラー等に関するデータの蓄積がほとんどなく、その必要性が指摘された。他

方、学習者がアラビア語の学習意欲を維持するためには、文法項目の教授順序だけでなく、特に時事的な内容を含んだ例文や読み物などは、そのアップデートも欠かせないとのコメントもなされた。(榮谷温子)

企画セッション3：Toward Multilayered Relations between the Gulf and Asia

本セッションは、中東と日本の関係に関する学術的研究に取り組む目的で企画された。中東と日本の関係は、欧米の中東との関係とは異なる特性を孕んでいるが、それはまだ十分には明らかにされていない。本セッションは、中東と日本が、欧米とアジアなどの良好な関係を維持しながら、関係を深化する視点の育成を目指している。国際関係論の専門家は、中東と日本の関係には周縁的テーマとしての関心しか払わないが、地域研究はその陥穽を埋める意義を果たすことができる。以下の質問は、コメントーターの横田貴之会員によるものである。

Steven Wright 会員の報告は、カタルの対アジア関係に関して、カタル外交の特質やエネルギー市場の構造的移行の観点から検討された。この際に、国際関係論、政治経済学、地域研究を混合する方法が採用された。そしてカタルのアジアとの関係は、複合的相互依存と概念化されるのが適切であると示された。また、アジア諸国の旺盛な LNG 需要の見通しのために、ガス価格の低下が見られても、カタルとアジア諸国の関係は今後も深化するとの考察が示された。これに対して、カタルの対欧州・対北米輸出振興策や、日本の LNG 需要減少の可能性のインパクト等に関して、質問された。

中村覚会員の報告は、1970年代以降、カタルで産業インフラ建設事業に従事した日本人技術者やビジネスマンが著した日本語の資料やインタビューを活用しながら、両国間の相互依存関係が多層化する過程を論じた。日本は、カタルの建国後、いち早く外交関係を樹立し、民間企業は産業多角化、人材育成、イスラーム理解に取り組んでいた。またカタルの LNG 開発事業では、日本の民間部門は、他国が撤退する中で踏みとどまり、輸出体制の完成を実現した。これに対して、対話外交のあり方を例にアカデミックな研究者が二国関係の発展にどのような貢献が可能なのか等が質問された。

堀抜功二会員は、日本とアラブ首長国連邦の戦略的關係に関して、エネルギー部門と非エネルギー部門の両方に着目して検討した。そして、日本政府の石油利権確保の方法として包括的アプローチが採用される一方、民間部門での対 UAE ビジネス進出、人的往来の規模、友好協会の草の根活動が拡充し、結果として日・UAE 間の多層的關係の強化が進展して、利権交渉が良好に推移する構造が示された。これに対して、UAE は、アジアとの関係を日本だけではなく、中国や韓国などとの視座でも拡大しているが、これをどう位置づけるか等について質問された。(中村覚)

企画セッション4：Saudi Arabia Paths towards New Moderation and Future Measures in 2030 under the Current Political Turmoil

The annual meeting of Japanese association for Middle East studies was held at Kyushu University in Fukuoka. It was a great opportunity to meet some of the Japanese scholars who are interested in Middle East studies. Dr. Tariq Elyas and myself have merged our work and presented

our papers together under the title of “Saudi Arabia Paths towards New Moderation and Future Measures in 2030 under the Current Political Turmoil”. Dr. Mamoon was the moderator of our session.

Indeed, we were very disappointed with the following issues:

- There was not any information regarding the association meeting in neither the association website nor Kyushu university website.
- The latest update of the association website was in 2012.
- We received the program of the panel sessions and paper presentations just one day before our flight.
- When we arrived, the registrations members told us that they have not received the fees from Dr. Esam Bukhary and they did not expect that we are coming.
- The number of attendees to the session was just five.

However, it was a good opportunity to visit the association booth and see valuable books in the field of Middle East studies. In addition, it was an opportunity to meet Dr. Maamoon and Dr. Maryam and some Japanese people who are interested in our field. (Essam BUKHARY)

第1部会

第1部会午前のセッションでは、CHOE Young-chol (Seoul Jangsin University)、KIM Suwan (Hankuk University of Foreign Studies)、佐藤紀子 (Pukyong National University) の三氏による報告が行われた。

CHOE氏は“Gush Emunim: Its Definition of Land of Israel and Settlement Movement”と題する報告の中で、67年戦争占領地に対するイスラエルの入植地建設の問題を、入植運動において中心的役割を果たしてきた宗教的シオニズム組織「グーシュ・エムニーム」(1974年設立)に焦点を合わせる形で検討した。運動の理論的指導者である Rabbi Zvi Yehuda Kook とその父の言説が分析され、統一された「エレット・イスラエル」(=「イスラエルの地」)に住むことでユダヤ人の物理的・精神的救済が実現するという思想が明らかにされると共に、入植運動の実態が検討され、またイスラエル最高裁が入植地建設に批判的判断を示した事例(1979年)も紹介された。質疑応答では、イスラエルにおける「司法」の性格、パレスチナ人を支援するイスラエル市民の運動の存在とその背景等について議論が交わされた。また、(報告中で紹介された)入植地建設を批判し、非ユダヤ人コミュニティーの市民的・宗教的権利も尊重することを求めた判事が、その論拠として『聖書』に言及した(=「バルフォア宣言と聖書の教えは共通」と主張)という興味深い事例に注目し、イスラエルにおける「政教分離」のあり方を問うコメントも出された。

KIM氏による報告“An Exploratory Study on the Development of Muslim Tourism Market in Korea”は、東アジア、特に韓国を訪れるムスリム観光客の実態を分析すると共に、その背景や特徴、事前の期待と満足度のギャップとその原因、解決策と今後の展望を検討するものだった。政治的理由(米ミサイル配備問題)による中国からの観光客減少、トランプ政権によるイスラーム教徒の米国「入国禁止令」影響等の複合的な要因

の結果、いかに現在の韓国にとってムスリム観光が重要となっているかが明らかにされ、インドネシアからの観光客と中東からの観光客の関心や嗜好の相違、購買行動のパターン等の興味深い事例が紹介されると同時に、「ムスリム・フレンドリー」なインフラをいかに整備するかという課題、文化的差異の理解や通訳の重要性等が指摘された。質疑応答では、「ハラール」概念の捉え方、ハラール認定システムのあり方や、ソウルに増えている「ハラール・レストラン」の実態、また観光をめぐる「中央」と「地方」の取り組みの差などについて議論が行われた。

佐藤報告“Constructing Ethnic Identity among the Syrian Orthodox Christians in North-Eastern Syria under the Syrian Civil War”は、「内戦」状況、国家解体の危機に陥った現在のシリアにおけるアイデンティティ形成の問題を、シリア北東部のシリア正教会教徒コミュニティの事例に焦点を当てて検討し、その複雑な力学を明らかにしようとするものだった。シリアの宗教的多様性は認めつつもエスニックには「アラブ」だとしていたアサド政権による統合のイデオロギーが崩壊する中で、シリア正教徒が「アッシリア民族」としてのアイデンティティを強調するようになってきていること、他方で北東シリアという地域の現実のなかではクルドとの関係性の調整が重要かつデリケートな課題となっていることが明らかにされた。質疑応答では、他のキリスト教徒コミュニティとの関係性、「アイデンティティ」形成の過程での政治エリートと庶民との対応の差、教会と政治との関係等について質問が出たほか、「アッシリア人意識」の性格、現在当該地域を支配するクルドとの関係性についても改めて議論が交わされた。（栗田禎子）

Qolamreza Nassr 氏（広島大学）は、“Movements towards Democracy in Iran: Reciprocal Influence of Ulama and Intellectuals”というタイトルの報告で、イランの立憲革命、石油国有化運動、ホルダード月 15 日の蜂起、イラン・イスラーム革命、緑の運動を事例に、ウラマーと知識人が相互にいかなる影響を与え合っているのかを分析した。報告では、ウラマーは、絶大な人気と宗教税によって大きな影響力を有しており、異なるイデオロギーや利害をもつウラマーと知識人が相互に利用しあったり、影響を与え合ったりしていることが明らかにされた。そして、とくに民主主義やイスラーム的規範にかかわる相互の理解のズレが、イランの民主主義を損ねていることが強調された。フロアーからは、ウラマーや知識人内部には多様な利害があり、一枚岩に論じることの限界についての指摘があった。

Scott Morrison 氏（Middlesex University）は、“Islamic Banking in the Islamic Republic of Iran”と題した報告で、1983 年に施行されたイランの銀行にかかわる法律を子細に分析した。イランはスーダンやパキスタンとならび、すべての銀行がイスラーム法に則っており、最大の資産を有するイスラーム銀行でもある。こうした銀行を規定している 1983 年法について、リバーの禁止、ガラールやムダーラバなどの規定の詳細な分析を通して、イランのイスラーム銀行の特徴を明らかにした。これに対し、イランの銀行のイスラーム銀行としての実態や、1983 年法の修正の有無などについて、活発な質疑が交わされた。（山尾大）

第2部会

午前の部の前半では、2つの報告が行われた。最初の報告となった森山央朗氏（同志社大学）の「10-12世紀におけるホラーサーン系『ハディースの徒』の理論展開と自己認識」では、ホラーサーンに遡る学統に連なる穏健な思想集団の理論展開と活動に焦点をあて、従来イラク系・ハンバル派法学系を中心に進められてきた、初期の法思想の展開に関与した諸集団の形成と活動に新しい視点を提供した。「ホラーサーン系」集団の自己認識やその分類に関しては、活用した史料の取り扱いについて意見が出されたように、これからさらに精緻かつ多角的な分析が期待される。

篠田知暁氏（日本学術振興会特別研究員）の「18世紀フェズの都市社会におけるマジズーブ」は、マジズーブと称される「理性を喪失した」聖者が都市社会でいかに受容されたかを、ウラマーが著した聖者の伝記集から具体的に明らかにしていった。フェズでこのような著作が著された理由としてはイドリース廟との関係が示唆されたが、質疑応答でもマジズーブとマジヌーンの概念の区別の重要性や、理性喪失者の聖性獲得という現象の時代や文化圏を越えた普遍的について指摘がなされ、どこに本報告の事例の普遍性と特殊性を見いだすのかということに参加者の関心が集まった。（後藤裕加子）

中町信孝氏の研究発表「イブン・アイニーの生涯：武人か文人か？」は、15世紀後半のマムルーク朝で活躍したイブン・アイニーの（1492年没）の経歴を分析した。イブン・アイニーの父方祖先は文人の家系であったが、本人は武官として要職を歴任し、スルターン・フシュカダム（在位1461-67年）の没後には次期スルターン候補にまで登りつめた。こうした武人としての栄達の背景として、父系祖先がマムルーク軍人たちとつながりを持ち、特に母がフシュカダムの義理の娘となったことで、宮廷において「スルタンの孫」と見なされたことが大きな意味を持ったと指摘した。この発表に対して、女性を介したつながりが軍事奴隷エリートのサークルにおいて持った意味や、軍人サークルと文人サークルの連関などについて、様々な質問・コメントが寄せられた。

橋爪烈氏の研究発表「ルトフィー・パシャのカリフ論：その思想的背景につて」は、オスマン朝の大宰相ルトフィー・パシャ（1563年没）が執筆した『イマームたちの知識に関するウンマの救い』を取り上げ、ルトフィー・パシャが、クライシュ族の出自を「イマーム」の条件とする主張にどのように反駁し、クライシュ族に出自を持たないオスマン朝の君主が「カリフ」であることをどのように論じたのかを分析した。その結論として、ハナフィー派の学説やハディースを用いて、出自にかかわらず「スルターン」は「イマーム」であると論じることで、オスマン朝の君主が「カリフ」であることを主張したと指摘した。この発表に対して、「イマーム」「カリフ」「スルターン」といった言葉の含意や用法、また、ルトフィー・パシャの議論の背景や意図などについて、多くの質問とコメントが寄せられた。（森山央朗）

第2部会午後のセッションでは、サファヴィー朝期イランに関する研究報告が2本、20世紀インド洋世界に関する研究報告が1本、合計3本の研究報告が行われ、参加者の数はそれほど多くなかったものの、いずれの報告についても活発な質疑応答が行われた。

徳永佳晃「17世紀後半におけるサファヴィー朝・ムガル朝関係の転換：カンダハール地方をめぐる両朝の係争に着目して」は、友好関係にあったサファヴィー朝とムガル朝の関係悪化の原因とされてきた、カンダハール地方をめぐる係争を丹念に分析することで、17世紀後半に二つの王朝の関係が悪化に転じたという定説を再検討するものだった。実際はこれ以前にも同地方の領有を主張することはあったが、外交上の懸案とならないように表面化させていなかっただけで、その状況を一概に友好的と評価することはできないと結論した。質疑では、在地の勢力の動向や史料の性格に関する質問が出された。

朝田郁「ハドラーミ移民の生きる世界：インド洋西海域を旅したアラブの軌跡」は、ハドラーミ研究が主に歴史学的手法を用いて東南アジア地域を中心に進められている現状に対し、人類学的手法を用いて東アフリカのハドラーミ移民の移住の実態解明を試みるものだった。本報告では、移民の語るライフ・ヒストリーを分析することで、第二次世界大戦の勃発によりインド洋東海域への移住活動が終わりを迎え、その代わりに、イギリス保護領という環境下で移動の自由が保障されていた東アフリカへの移住が促進された、とその実態と背景にある国際情勢を明らかにした。質疑では、フィールドワークの手法や移住先における職種などに関する質問が出された。

近藤信彰「サファヴィー朝期イラン法廷制度再考」は、イラン法廷制度についての学界の定説となっている、オルフ＝シャリーア2法廷並立モデルを批判的に検証した。新たに出版された史料を含むペルシア語史資料を渉猟することで、オルフ法廷もシャリーアを尊重しており、実際はシャリーアを中心とする一つの法体系だったのではないかと、新しいモデルを提示する意欲的な報告であった。質疑では、提示された新しいモデルに対して、シャリーア中心ではなく、シャリーアとオルフの融合ではないかという対案が出されるなど、活発な意見交換が行われ、第2部会は終了した。（大塚修）

第3部会

午前のセッションは、オスマン朝についての研究報告が、ずらりと並んだ。最初の発表は、秋葉淳氏（千葉大学）による「ディーワーンと法廷：18世紀オスマン帝国の地方における司法行政」であった。オスマン朝における司法の場としてはシャリーア法廷がよく知られているが、この報告では地方官、具体的には州総督によるディーワーン法廷が取り上げられた。同法廷への嘆願者たちは司法の枠組みから外れた介入を期待した一方、為政者の側は手数料の獲得が動機となっていた可能性が示された。

つづいて、岩本佳子氏（日本学術振興会特別研究員）が、「参照資料としての租税台帳：オスマン朝行政における17世紀以降の租税台帳の活用に関する考察」と題する発表を行った。ここでは、Tahir DefteriのうちMufassal Defteriが17世紀以降に「本来の」役割を失った後も書き込みが続けられ、当該地域における基本的なデータを提供する台帳としての意義をもちつづけた可能性があることが示された。（澤井一彰）

第3部会午前の第3・4報告はいずれもオスマン朝史に関するものであった。

佐治奈津子氏による「15-16世紀におけるオスマン朝の鉱山経営：クラトヴァ鉱山の

請負台帳の分析から」は、現在のマケドニアにあったクラトヴァ鉱山に関する、1478～1537年までの間における経営権の複数の請負契約を記録している請負台帳を使い、いまだ実態がよく分かっていないオスマン朝の鉱山経営の一端を明らかにした有意義な発表であった。ひとつの史料を丁寧に読み込んだ実証的な報告だったといえるが、参考文献が挙げられていなかったため、質疑では先行研究について、クラトヴァ鉱山の位置づけ（何故クラトヴァ鉱山を扱ったのか）、請負台帳以外の史料などについての質問がなされた。

永島育氏による「アブデュルハミト二世時代におけるオスマン語の地理叙述について」は、ブルガリアなどオスマン帝国の特権州が、19世紀後半～20世紀初頭の間におスマン語で書かれた地理叙述に関する書物において、どのように記されたのかを検討したものであった。多くの史料を丹念に読み込んでいる点は評価できるが、報告の表題と内容がやや異なっていたことや、時間を少しオーバーしてしまったことから、もう少し論点を絞るべきだったと思われる。質疑では、扱った史料の選定、特権州の位置づけなどについての質問があった。（吉田達矢）

第3部会の午後の部では、トルコ共和国（1923-）に関する三つの報告がなされた。宇野陽子氏（津田塾大学）は、同国の女性参政権について、その実現を訴えた「トルコ女性連盟」を中心に検討した。とりわけ、この団体の見解と、アタテュルク政権下の議会における議論とのズレに焦点があてられた。副題にあった「国際関係の視点」を組み込んだ、さらなる成果が期待される。幸加木文氏（千葉大学）は、昨年7月のクーデタ未遂事件を考察し、この事件は、首謀者とされたギュレンおよびその運動の政治化と、エルドアン大統領の強権化によるものであり、その対立が背景にあると論じた。また、事件を機に明らかになった、ギュレン派内部の命令系統などについても言及した。今井宏平氏（日本貿易振興機構アジア経済研究所）は、トルコにおけるシリア難民の受け入れについて、かつてのブルガリアからトルコへの難民支援策と比較しつつ、法整備の立ち後れなどを指摘した。また、ブルガリア難民のときもそうであったが、トルコは難民の「統合」に失敗してきたと結論づけた。各報告の参加者はいずれも20数名であり、報告後には活発な質疑応答がなされた。本部会で扱われたテーマ、すなわち、女性の地位向上、「イスラーム派」の動向、難民の受け入れは、いずれも現代トルコの重要な問題であるが、本部会において、その最先端の研究成果が示された。（長谷部圭彦）

第4部会

縄田浩志氏（秋田大学）は、「黒サンゴ製の数珠“sibhat al-yusr”の特質について」という報告で、エジプト・シナイ半島の漁民への聞き取り調査にもとづいて、紅海で実際に行われていた黒サンゴを素材にした数珠について分析した。エジプトで最も好まれる黒サンゴ製の数珠（スィブハ・ユスル）は、潮の流れが速い50メートル以上の深い海にしか生息しないため、採取が困難である。ゆえに、それは神聖なものと考えられ、採取の前にバスマラを唱える必要があるなど、様々な語りが残っていることが明らか

にされた。以上から、資源管理に鑑みると、欧米とは異なるイスラーム的な規範がかなり色濃くみられる点が指摘された。フロアーからは、サンゴと宗教規範や黒サンゴ利用の地域的な広がりについての質問が挙げられ、活発な議論が交わされた。

池田昭光氏（東京外国語大学）は、「宗派主義的社会と相互行為：レバノンのフィールドワーク資料の例から」という報告で、レバノン・ベカー平原3番目の町カップ・イリヤース（人口約5万人）でのフィールドワークにもとづいて、「宗派の違いを否定するかなのようなふるまいそのものが、実は宗派の違いを支えている」という点を明らかにした。報告で提示されたキーワードは「知らないふり」であり、この知らないふりが、日常的行為の一部として宗派主義を支えているという。池田氏は、人々の相互行為に着目し、関係性的な視点から宗派主義を論じたが、これに対して、フロアーからは、時代的／歴史的、政治的な影響の重要性についての質問が多数寄せられ、質疑が活発に行われた。（山尾大）

第4部会、3番目の発表は、佐藤麻理絵氏による「現代ヨルダンにおけるホスト社会形成：レジティマシーをめぐる一考察」であった。本発表は、パレスチナ難民、イラク難民、シリア難民等、中東で最も多くの難民を受け入れているヨルダンで、「ホスト社会」がどのように形成されてきたのかを論じたものである。現在、ヨルダンでは、難民支援にあたる民間のイスラーム系慈善組織が複数存在し、緊急支援から長期支援に至るまで多くのボランティアを動員している。一方、ヨルダン政府は、法改正を通じた民間NGO規制や資金力・組織力に勝る王族主導型NGOを用いて、イスラーム系慈善組織の急速な拡大や政治化をけん制しつつ、ホスト社会としての役割を果そうとしてきた。そうすることで、西洋諸国からの援助を呼び込み、開発を促進させ、体制を維持させてきたという。慈善組織の活動目的やそれらが唱道する価値等に関する詳細な分析が提示されたが、質疑では、タイトルのレジティマシーが具体的に何を指すのか、民間NGOと王族主導型NGOの関係はどのようになっているのかといった質問が出された。

4番目は、千坂知世氏による「イランの対外政策決定過程における国会の役割：第9期国会によるJCPOAの履行承認を事例として」というタイトルの発表であった。本発表は、2015年7月に国連常任理事国+独とイランとの間で締結された核問題に関する「包括的共同行動計画（JCPOA）」を、イランの現政権が、国会を利用することで、その支持母体である反米勢力の反発（内政コスト）を抑え、危機を回避した事例とみなし、国会の特別委員会での議論や体制指導部の国会への介入等の事例を分析したものである。国会における議員の発言を分析した興味深い発表であったが、「対外政策決定過程における国会の役割」を明確にするためには、国会での議員の発言の真意や効力、イランの政治体制における国会の位置づけ等もう少し踏み込む必要があるのではないかといったコメントがなされた。（桜井啓子）

臼杵悠会員による報告「移住がつくる国家ヨルダン：人口センサスと世帯調査から」では、2004年の人口センサスと2008年アンマン世帯調査に基づいて、ヨルダンの移

住者を分析したものである。分析の結果、移住者は年齢層が高く、教育水準も高めであること、職業地位は移住者であるか否かでは差はないことなど、アンマンの労働市場では、移住者か否かに関係なく労働者が受け入れられており、移住者に対してオープンな空間であることがわかったとの報告がなされた。

次に、小島宏会員による報告「西欧ムスリム移民二世におけるコーラン教室通学と宗教的食事制限」では、幼少期のコーラン教室通学などが西欧のムスリム移民二世における宗教的食事制限にどう影響するのかについて、2005年から2007年のドイツ、オランダ、ベルギーのTIES調査個票データおよび2008年のフランスのTeO調査個票データ等を用いて統計分析した報告であり、コーラン教室通学の影響だけでなく、性別、卒業した小中学校で移民子弟が多数派かどうか、首都圏居住かどうかによるその影響の違いについても分析された。(森田豊子)

第5部会

午前の部では主にアラビア語学に関わる発表が行われた。鷲見朗子会員による「アラビア語集中講座合宿：アラビア語学習の動機づけ向上を目指した講座の概要とその効果」は、同会員が科研費による課題研究の一環として実施したアラビア語集中講座合宿についての詳細な報告であり、自己決定理論を援用して合宿の動機づけの評価を行った。全体的に実務的な観点から報告と質疑応答が行われ、ネイティブ講師と日本人講師の役割分担や資金上の課題などについて活発に議論がなされた。学習者が比較的少ないアラビア語教育において、このような大学の垣根を越えた活動が重要である点が再認識される機会でもあった。

次いでアブドラー・アルモーメン会員による「日ア語の視点と表現の違い：発想と表現をめぐる」では、日本語表現のアラビア語訳を検討することによって、空間認識の違いや「行為者中心表現」「事柄中心表現」などの言語特性が指摘された。いささか憾みが遺ったことに発表時間が不足して後半部分が十全に論じられなかったが、会場からは具体例についての異なる解釈も示されるなど活発かつ有意義な質疑応答が行われた。先行研究として80年代前後の日英語対照研究に大きく拠っており、英ア語の対照に関する質問も出されたが、アラビア語からのアプローチが英語の場合とどのように異なるのか十分に議論する時間を欠いた。さらなる発展を今後の機会に俟ちたい。(鶴戸聡)

第5部会は、第3発表まではアラビア語学をテーマとする発表から、第4発表からはイスラーム思想を扱う発表から、構成されていた。そのうち第3発表と第4発表は森本一夫が司会を担当した。両発表を通じて、聴衆はおおよそ10名程度であった。

第3発表は竹田敏之会員(京都大学)による「インターネット時代における湾岸メディアを通じた現代アラビア語の多様化とその展望」であった。今日その存在感を増している湾岸メディアに着目し、湾岸メディアが生み出している新語・新表現および同メディア上で見られる口語使用についてそれらの特徴や使用の文脈を考察し、同時に湾岸メディアによって進められているメディア・アラビア語の規範整備をも検討した。

第4発表は相楽悠太会員(東京大学)の「イブン・アラビーによる『心が神を含む』

という神聖ハディース解釈：先行スーフイーとの比較を通じて」で、この発表では、イブン・アラビーが「わたしの大地も天もわたしを含まないが、信心あるわたしのしもべの心はわたしを含む」という神聖ハディースを解釈するにあたり、自らの「顕現」理論や「完全人間」論を用いた独自の解釈を行っていたことが示され、そのことの持つ意義が論じられた。（森本一夫）

第5部会午後のセッションでは、イスラム圏で生まれた思想を対象とする3つの報告がおこなわれた。まず、大淵久志氏による「ファフルッディーン・ラーズイーの天使論と倫理思想」は、預言者と天使のどちらが優れているのかという神学問題を主題とし、一著作のみに依拠しアシュアリー学派神学者ラーズイーの論を規定した先行研究の不備を指摘するものであった。本報告によれば、三著作における預言者優位説の変質を考察し、行為の困難さから意図の純正さへと基準が変わったことで優位性は人間には判断不可能なものになったという。質疑において倫理という語の定義が問われるなど説明不足な点もあったが、これまでにない視点からの神学研究であり今後の進展が期待される。

次に、早川英明氏による「マフディー・アーミルの思想における国家と宗派主義の関係」は、レバノン共産党員のアーミルが同国の宗派主義と内戦をマルクス主義の観点からどう位置づけたのかを分析するものであり、アーミルは宗派主義を前近代の遺産とせず、コロニアルな資本主義体制下のブルジョワ国家の所産として位置づけた、と結論づけた。質疑においてはイラクなどの左派との関係性について問われ、発表者は今後の検討事項と返答したが、本研究のさらなる広がり大きく寄与しうる質問であったように思われる。

最後に、桐原翠氏による「ハーシム・カマーリーの現代イスラーム思想：ウンマ論とワサト主義を中心に」は、アフガニスタン出身の「ディアスポラ・イスラーム知識人」カマーリーのこれまでの人生を辿りつつ、その特徴的思想である、危機を乗り越えるための革新を強調するウンマ論と、非一神教をも視野に入れたコスモポリタンのワサト主義に考察を加えた。質疑においてはそのディアスポラ性、政権との関係、英語で執筆することの意義などについて有益な質問があり、これらの質問を十分に踏まえた今後の研究の発展に期待したいところである。

以上の三報告はいずれも、若手研究者による、新たな視点からの研究発表、あるいは研究主題としてあまり注目されてこなかった対象に関する研究発表であり、思想研究の裾野の広がり可能性を実感させてくれるものであった。（菊地達也）

第6部会

清水学会員による報告「グローバル化・金融化のなかの中東経済」では、1970年代半ば以降に「グローバル化」「金融化・証券化」によって第二段階を迎えた世界の資本主義経済を概観し、実物経済だけでは大きな利益が得られなくなっている現代世界において、「金融化・証券化」が進んでいること、その中で、①イスラエル経済、②湾岸産油国型経済、③アラブ社会主義にルーツを持つ国家経済という三つに分類された中

東経済への影響について考察された。

次に、岡室美恵子会員による報告「ヨルダンの貿易構造分析」では、各種貿易指数などを算出することで、中東の非産油国であるヨルダンが WTO への加盟や、米国他との FTA 締結などを通じ輸出を拡大させてきたこと、近隣湾岸諸国への貿易依存度が高いこと。また、加えてリン鉱石、カリウムなどの他、アパレル製品や薬品などのヨルダンが主力産業として掲げている産業の現状分析、その分析から提言できることなどが報告された。(森田豊子)

安田慎会員による「イスラミック・ホスピタリティ論再考：アダブ文献におけるディヤーフア・サファルをめぐって」は、「イスラーム諸学の文献のなかで論じられるホスピタリティ (ディヤーフア)」の概念を検討しつつ、イスラミック・ツーリズムの議論に「礼儀作法 (アダブ) としてのディヤーフア・サファル」という新たな視点を導入しようとする意欲的な発表であった。膨大な資料の渉猟もあってか終盤の観光学との接続にいささか急であったが、中世においても作法書の類がもてはやされていたことが窺われ、今日のハラール産業とも共通する問題を剔抉することとなった。このような歓待の外形化とムスリムとしての内面的な倫理の鏝迫り合いを古今を通じた現象として検討する本研究は今後の進展が大いに期待される。

竹村和朗会員による「ワクフは所有権か：古典学説と現代エジプト法制の比較検討から」は、2012 年憲法起草委員会の議事録を検討することによって、現代エジプトにおいてワクフがどのように認識され、また取り扱われているかを探ったものである。会場からは、「ミルキーヤ (所有権)」という用語がイスラーム法に謂う同語とは別物ではないか、などと法学的見地からの指摘が多くなされた。発表者はエジプトの土地法制に関する長年の研究に基づきつつ新たな課題に取り組んでおり、研究発表をたき台に専門的な聴衆からの意見を徴取する場として学会が機能していることが確認された。(鶴戸聡)

第 6 部会午後の部では以下の 2 報告が行われた。

池邊智基会員による報告「労働の教義と実践：セネガル・ムリッド教団のバイファル」は、ムリッド教団内の運動共同体であるバイファルを特徴づける教義としての「労働」の実践について、都市部と農村部でのフィールド調査に基づき、その多様な実態を示すことで、先行研究における解釈に再検討を迫るものであった。報告者は「生計を立てるため」と「導師への奉仕」という両義的な解釈示したが、質疑において「労働」と訳定された原語・リゲイの意味範疇の広さにも起因する、多義的であいまいなものをいかに解釈するか、という課題の難しさについて指摘がなされた。

須永恵美子会員による報告『「人間の経済的問題とそのイスラーム的解決策」の出版に関する一考察：マウドゥーディーによる近代イスラーム経済学の始まりと初期の思想』は、パキスタンの思想家・マウラーナー・マウドゥーディーの経済論について、1941 年のウルドゥー語の初版の内容紹介と、その後の改訂・英訳によって生じた議論の変化から、南アジアにおけるイスラーム経済思想の展開を読み解くものであった。質疑では利子を意味するウルドゥー語の「スード」の用法に注目が集まり、英訳との

対照からアラビア語の「リバー」とは必ずしも同義で用いられていない点に関して、著者の議論の展開に南アジアでの独自性あるいは近代性が見出しうるのではないかとの指摘がなされた。(石黒大岳)

第7部会

今野泰三氏による研究発表では、パレスチナにおけるユダヤ人入植地の拡大について、それがオスロ・プロセスに代表される和平交渉と、イスラエル史の中でどのように結びついているのか、歴史的展開をふまえて評価する試みがなされた。報告者は、通常「1967年以降」に注目されるシオニズム運動の植民政策を、より広く捉え、イスラエル建国以前の入植を含めて位置づける必要性を指摘した。またそれらを一貫した流れと捉えずに「1967年以降」のみを入植地問題と呼ぶことを、それ以前の占領を正当化する「グリーンラインのイデオロギー」と名づけた。入植運動の一例としては、建国以前に結成されたハ・ポエル・ハ・ミズラヒ運動を取り上げ、宗教シオニストがイスラエル社会の他の階層とどのような関係を構築してきたのか、考察が加えられた。

金城美幸氏による研究発表では、イギリス委任統治期の代表的名望家であるムハンマド・アミン・アル＝フサイニーに焦点が当てられ、パレスチナから亡命する以前の彼の評価と役割について、歴史的再考が行なわれた。委任統治下では、権力の源泉として宗教が重視され、ハーッジ・アミンは大ムフティーなど宗教行政の職を務めた。だが、その人選は、必ずしもパレスチナの諸名望家の間で歓迎されたものではなかった。対イスラエル抵抗運動は、イステクラル党やカッサムらによる他の組織が主導した。それらの運動と、シオニストとの間での衝突が広がると、イギリスは調査委員会を設け、ハーッジ・アミンを通して統制を試みた。しかし暴力は停止せず、ハーッジ・アミンはイギリスとパレスチナ民衆双方からの支持を失い亡命することになる。

両者の報告は、ともにパレスチナ・イスラエル史において著名な対象を、新たな文脈と歴史的資料の中に位置づけようとする意欲的なもので、30名程度の参加者との間で活発な議論が行なわれた。(錦田愛子)

児玉恵美「レバノンのパレスチナ解放運動：難民キャンプにおける動員と参加から」はレバノンの難民キャンプにおいてフィダーイー、すなわちPLOの組織する武装闘争への参加呼びかけと動員がなされていた様子を、UNRWAの学校教師ムハンマド・ハッシャーンの記事から読み解くものである。ハッシャーンは、人々が民族解放運動に参加して命を落としていく原因を彼らの社会的水準の低さにあると考えていた。そこで社会的水準の向上には学校教育が必要であること、そのために彼自身は教育に生涯を捧げたことを示し、難民キャンプにおける動員構造の一面を論証した。

山本健介「エルサレムと聖地ハラム・シャリーフ／神殿の丘の帰属問題」はオスロ合意以降のヨルダン政府による当該問題への関与を論じた報告である。2000年代に入り、聖地が政治的重要度を増したことを考える上で、1990年代の動向を明らかにすることが必要だというのが、本報告の研究動機である。この報告では聖地問題をめぐっ

て自治権や管理権といった法的権利の他、イスラエル政府、パレスチナ自治政府、ヨルダン政府、サウジアラビア政府が問題に関与する主体として浮かび上がってくる。このうち支配・管理の対象としての聖地および領域主権の問題をめぐって、ヨルダン政府とパレスチナ自治政府の間で紛争と対立、交渉があった経緯を明らかにした。両報告とも、活発な質疑応答とコメントがなされた。(浜中新吾)

日本学術振興会の鈴木啓之特別研究員が、『『無名』パレスチナ人の回顧録刊行：中東現代史を見る新たな資料としての考察』と題して報告した。報告は、1990年代以前は政治的な著名人に限られていた回顧録の出版が、2000年代以降、『パレスチナ百科事典』などの資料に記載されない人々からも行われるようになった点を指摘した。その上で、これらの回顧録は、事実関係の確認などの留保が必要だが、忘却された事実の発見や既存の著述に対する批判的分析の上で有益な資料となりうると結論付けた。質疑では、「無名」の人々の回顧録が刊行されるようになった背景や、これらの回顧録の特徴などについての質問があった。

京都大学大学院の池端露子氏は、「ウンマ・汎イスラーム主義・国民国家：OIC 研究序論」と題し、イスラーム協力機構(OIC)の紛争予防・軽減・解決能力に着目した研究を行う上での論点整理を行った。報告では、イスラーム世界が目指すあるべき姿と国民国家との関係をめぐる議論は時代状況に応じて変遷してきた点を指摘しつつ、その中でのOICの歩みを振り返った。そして、OICの様々な側面を包括的に監査することを通じ、一見弱体であるかのようなOICの紛争解決機能を判断すべきであると提起した。質疑では、現在の中東における宗派主義に対するOICの取り組みについての質問や、国際関係・外交氏の観点からOICを分析する視点が必要である旨の指摘があった。

午後の遅い時間帯での報告だったが、多くの参加が得られ、部会は盛会のうちに開催された。(高岡豊)

第8部会

岡井宏文氏の報告「在日イスラーム団体の形成と諸活動の展開：タブリーギー・ジャマーアトと多文化的状況に着目して」は、多文化共生論批判の観点からの在日イスラーム団体研究の課題をふまえ、タブリーギー・ジャマーアトの日本での展開の特徴性として、主として東京・群馬の同団体本部の調査から、閉鎖的でも窓口的でもない活動の独自性と多様性を明らかにした。報告後はこれら本部の活動資金や本国インドとの関係、活動の互恵的な側面の有無、在日ムスリムの活動一般やモスクの意義の変化の有無等につき活発な質疑応答がなされた。(堀井聡江)

第8部会午前後半の部では、日本とイスラーム世界との交流をめぐる2つの報告がおこなわれた。まず、子島進氏(東洋大学)によって、「ボランティア活動を通して見えてくるイスラームの価値観：比較文化論の視点から」と題された報告がおこなわれた。同報告は、日本人とムスリムとの間の差異ではなく、むしろ共通点についての考察をおこ

なうことで、両者共通の地平を積極的に探ろうとするものであった。福島県や東京でのムスリムによるボランティア活動の観察を通じて、ムスリムの価値観と日本的な価値観の間にある共通性を指摘した本報告は、グローバル化の進展によって、ムスリムとの共生の必要性が説かれつつある今日の日本の状況に対応したものと見えよう。

つぎに、リーム・アフマド氏（カイロ大学）によって、「エジプト人の日本発見：ジルジャーウィーとムハンマド・アリー公の『日本旅行記』」と題された報告がおこなわれた。同報告は、1906年にエジプト人として初めて来日した可能性が指摘されているジルジャーウィーと、1909年に来日したヘディーブ・アッバース・ヒルミー2世の弟であるムハンマド・アリーの2人の人物に焦点を当てて、彼らのエジプト出国から日本に至るまでの足跡や、日本に対するイメージの違いを、複数の資料をもとにして論じるものであった。いずれの報告も、日本とイスラーム世界との交流を知る上では大変貴重な報告であり、報告後には盛んな質疑応答がおこなわれた。（千葉悠志）

午後の部では、記録映画とアメリカ文学という異なる文化事象に関する報告が行われた。

前半の、岡崎弘樹会員（独立研究者）による「シリア記録映画にみる政治的、社会的矛盾の象徴：オマル・アミララーイの農村三部作を通して」では、20世紀シリアを代表する記録映画監督オマル・アミララーイがシリア当局に依頼されて製作したシリアの農村に関する映画を取り上げ、その作品に映し出される「農村」がダム建設などで発展を遂げると同時に、その発展から取り残されてしまった農民の困窮をも映し出していることをあきらかにした。体制を正面から批判するのではなく、映像でその社会矛盾を描くことができる記録映画の可能性を示唆した報告は大変興味深かった。用意していた実際の映像が、機材のトラブルで見ることができなかつたのが大変惜まれる。

後半は、外山健二会員（山口大学）の「アメリカ文学のイスラーム：第一次報告」であった。報告者が「第一次」と銘打っているように、本報告は壮大な研究テーマの中途報告の色合いが濃かった。ホーソンの『優しき少年』とヘミングウェイの『アフリカの緑の丘』というアメリカ文学の大家の作品に見られるイスラームに関する表象を分析したものであったが、ホーソンの作品に関する部分に時間が割かれ、ヘミングウェイの作品に関しては言及が少なかった。加えて、この2作品を選出した理由や引用部分の選択など不明瞭な部分があり、聴衆からも質問が相次いだ。今後第2、第3の報告を重ねることで研究の全体像が明らかになることを期待したい。（細田和江）

【第33回年次大会を終えて】

日本中東学会第33回年次大会は、合計195名の方々にご参加いただき、盛会のうちに終了いたしました。大会実行委員一同、参加者の皆様方にお礼申し上げます。事前登録は例年より少なめで心配しておりましたが、最終的には多くの方々にご来場いただき、地方開催としては盛況だったといえるのではないのでしょうか。年次大会の運営を引き受けるにあたって、このような大役を果たすことができるだろうか、という不安があったのは言うまでもありません。しかし、過去の大会実行委員から受け継いだ資料や、学会事務局そして理事の皆さまのサポートのお蔭でなんとか大過なく終える

ことができ、胸をなでおろしております。

さて九州大学箱崎キャンパスは、2018年夏に伊都キャンパスに全面移転する予定です。ご来場いただいた方はご覧になったかと思いますが、移転済みである旧理工学部関係の建物はすでに取り壊しが進んでいます。大会会場となった文系講義棟の設備も老朽化しており、とくにマイクやプロジェクター関係でご迷惑をおかけした部会もありましたが、「最初で最後の箱崎キャンパスでの中東学会大会」と言うことでご寛恕いただければ幸いです。移転先の伊都キャンパスは、縄文時代以来の古墳群などが建築された歴史的な地にあります。交通アクセスはやや不便ですが、研究会などの機会があればぜひお越しください。

(小笠原弘幸 大会実行委員会事務局長)

【大会決算】

日本中東学会第33回年次大会決算

収入の部		支出の部		
大会開催費	(学会本会計より)	400,000	印刷代(ポスター・要旨集)	52,660
大会会場費	(学会本会計より)	114,000	郵送費(プログラム他)	127,308
大会参加費	(事前支払 126名)	126,000	懇親会費	499,500
	(当日支払 47名)	94,000	アルバイト代(学部生)	161,000
懇親会費	(一般・事前支払 76名)	380,000	アルバイト代(大学院生)	152,000
	(学生・事前支払 15名)	45,000	会場使用料	114,000
	(一般・当日支払 14名)	84,000	初日パネリスト謝礼・交通費	85,900
	(学生・当日支払 4名)	16,000	2日目お弁当代	66,000
お弁当代		51,000	錯誤入金返金	11,000
書店寄付・教室使用料(2店分)		16,000	消耗品費等(コピー用紙他)	19,064
錯誤入金		11,000	振込手数料	2,592
			余剰金(年次大会特別基金に繰入)	45,976
収入合計		1,337,000	支出合計	1,337,000

託児所決算

収入の部		支出の部		
利用者負担	1日3000円×5人	15,000	託児所運営委託費	88,992
託児所特別基金からの拠出		83,424	教室使用料	9,000
			振込手数料	432
収入合計		98,424	支出合計	98,424

第6回日本中東学会奨励賞の選考結果および同賞授与式

第6回日本中東学会奨励賞奨励賞の審査が同賞選考委員会において行われた結果、以下の理由により竹村和朗会員の以下の英文論考が選ばれました。なお、同賞授与式は2017年5月14日、九州大学で開催された日本中東学会第33回年次大会において総会終了後に行われました。

【授賞対象論文】

TAKEMURA Kazuaki, "A Sales Contract: The Mechanism for the Private Ownership of Reclaimed Desert Land in Contemporary Egypt" AJAMES 31 (2): 207-236, 2015 (竹村和朗「売買契約書：現代エジプトにおける沙漠開拓地の私有の仕組み」『日本中東学会年報』)

【授賞理由】

本論考は、サーダート期以降のエジプトにおける「国有地の私有化」という現象に沙漠開拓地の事例から迫り、その実態と具体的メカニズムを明らかにした研究である。沙漠開拓地の社会に沈潜した人類学的なフィールド調査と法律分析とを組み合わせるといふユニークな手法により、「私有化」に至る過程でのさまざまなアクターの役割、国家と社会との複雑な関係性を明らかにし、地域研究の新たな可能性を提示することに成功している。法社会学・法制度史、開発人類学等の分野から見ても興味深い論考だと言える。また歴史学的にも、1970年代後半以降のいわゆる「インフィターフ（開放政策）」期のエジプトの経済・社会・政治にどのような変容がもたらされたのかを、地域社会の視点から描き出した貴重な現代史叙述と位置づけることができ、これまで日本で蓄積されてきたエジプト史研究・エジプト農村研究等の成果を継承・発展させる仕事と評価することができる。（奨励賞選考委員会 委員長：栗田禎子）

【受賞の言葉】

今回、第6回日本中東学会奨励賞をいただくことになり、大変嬉しく存じます。受賞対象となった論文は、本年（2017年）4月に提出した博士論文の一部となったものであり、本論文を含め、長い間ご指導くださった東京大学の長沢栄治先生には、心から感謝申し上げます。また、厳しくも建設的なコメントをくださった査読者の先生方、本論文をご推薦くださった選考委員会の先生方にも深く御礼申し上げます。

本論文は、現代エジプトの沙漠開発現象を現地の視点から捉え直すことを目的に、そうした開発地域の一つであるバドル郡という地域社会でフィールドワークをしていたときに、偶然見ることができた一通の土地売買契約書を発端として書かれたものです。現地の人々にとっては当たり前の契約書に過ぎなかったのかもしれませんが、そのときの私には、「沙漠開拓地にもこんなものがあったのか」という大きな驚きと刺激を与えてくれたものでした。また、この契約書の内容と意義を考察することを通じて、沙漠開発に接近するための方法としての「法」の存在に気づくことができました。本論文で手探りのまま行った、日常生活における法制度の実践に関する研究は、まだまだ発展途上の段階にありますが、現代中東の社会・文化に接近するために大変重要なテーマだと考えています。

先にも少し触れましたが、本年4月に長年の重荷を下ろすことができたので、心機一転、PD研究では「現代エジプトのワクフ」に対象を変え、ワクフに関する国家行政の介入や、ワクフを通じた法と社会の関わりについて論じていきたいと考えています。行き慣れない役所に行き、文書を探すことにどのような意味があるのか、法令や判例を読み込むことがフィールドワークとどのように両立するのか、まだわかりませんが、

あのときの土地売買契約書のような、なにか心に響く資料に出会えることがきっとあると信じて、これからも研究に邁進していくつもりです。

この度は、まことにありがとうございました。(竹村和朗)

第34回年次大会の開催について

2018年度の第34回年次大会は、上智大学が担当校となりました。日程は2018年5月12日(土)・13日(日)の両日で、会場は上智大学四ツ谷キャンパス(東京都千代田区紀尾井町7-1)です。上智大学での開催は1989年の第5回年次大会以来ということになります。最寄り駅は、四ツ谷駅(JR中央線/総武線、地下鉄東京メトロ丸の内線/南北線)です。実行委員会を中心に土曜日の講演会等をこれから企画いたします。新緑の四ツ谷・真田堀の向かいへどうぞご参集くださいますようお願い申し上げます。(大会実行委員長 小牧昌平)

公開講演会のお知らせ

日本中東学会第23回公開講演会を下記の通り開催いたします。

「中東=戦争」のイメージはありませんか? 実際、中東では戦火が絶えないのですが、それはなぜなのか。「核廃絶」を中心に世界平和の実現を訴え続ける「ヒロシマ」から考えてみましょう。

「中東の戦争と平和：ヒロシマから考える」

日時 2017年9月30日(土) 14:00-17:20 (開場 13:30)

会場 広島国際会議場中会議室(広島県広島市中区中島町1-5(平和記念公園内))

アクセス <http://www.pcf.city.hiroshima.jp/icch/access.html>

講演会ポスター：http://www.james1985.org/public_lectures/public_lecture_2017.html

司会 桜井啓子(早稲田大学国際教養学部教授)

講演1 吉村慎太郎(広島大学大学院総合科学研究科教授)

「中東の戦争・核・平和：新たな理解のための視点」

講演2 黒木英充(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授)

「シリア内戦：最古の都市文明の地から見る人類の近未来」

講演3 吉川元(広島市立大学広島平和研究所長)

「戦争と平和の歴史：平和と人間の安全保障の相克」

コメント1 川野徳幸(広島大学平和科学研究センター長)

コメント2 栗田禎子(千葉大学文学部教授・パグウォッシュ会議評議員)

参加費 無料（事前登録の必要なし。どなたでも参加できます。）

後援 広島大学大学院総合科学研究科、広島大学平和科学研究センター、
広島市立大学広島平和研究所、中国新聞社

会員の異動

新入会員の連絡先等詳細、その他の会員の所属先・連絡先の訂正・変更については、
近日発行の会員名簿をご参照ください。

【新入会員】

【2016年度末をもって退会した会員】

事務局より

今年度より事務局長を拝命することになりました。急なお話だったこともありますが、今年の年次大会には全くお役に立つことができませんでした。今回の年次大会の成功は、ひとえに清水和裕委員長や小笠原弘幸事務局長をはじめとする大会実行委員会の皆様と森山央朗前事務局長のご尽力の賜物です。厚く御礼申し上げます。来年の年次大会に向けた準備がまもなく始まりますが、昨年の大会事務局長としての経験を活かし、年次大会の円滑な準備に微力を尽くす所存です。事務局の方は、本格的な移転後に必要な諸手続もようやく無事完了し、なんとか落ち着きが見られるようになりました。もちろん、歴代の事務局のように恙なく業務をこなせるようになるまでにはまだまだ時間が必要ですが、幸いなことに事務補佐に優秀な人材を迎えることができ、私個人は大船に乗ったようなつもりでおります。どうぞ宜しく願い申し上げます。 (勝沼聡)

編集後記

第 17 期のニューズレター編集を担当することになりました。よろしく願いいたします。と、言っている端から発行時期を例年より遅らせてしまいました。ひとえに私の怠慢のなせる業です。会員諸氏に陳謝するとともに 149 号以降は遅滞なく発行されるよう努めますので、どうかご寛恕のほどお願い申し上げます。 (赤堀雅幸)

日本中東学会ニューズレター 第 148 号
発行日 2017 年 9 月 30 日
発行所 日本中東学会事務局

日本中東学会事務局
〒108-8345 港区三田 2-15-45
慶応義塾大学文学部 勝沼聡研究室内
E メール: james@james1985.org
<http://www.james1985.org/>
郵便振替口座：00140-0-161096(日本中東学会)
銀行口座：三井住友銀行渋谷支店(普)5346808
(日本中東学会)
ゆうちょ銀行口座：〇一九店(当)0161096
(ニホンチュウトウガクカイ)